

## 伝統的な木造建築でも 省エネ基準は越えるべき壁

木造住宅の省エネ化が進むなか、伝統木造はどうあるべきか。長年伝統的な木造建築をつくり続けてきた松井郁夫建築設計事務所（東京都中野区）代表の松井郁夫さんに聞いた。

——これまで省エネとどのように向き合ってきたのか？

阪神大震災を契機に木組を見直し、

することになったのは東日本大震災で、外皮の性能も追求し始めた。現在では外皮計算や一次エネルギー消費量の計算を行い、13年基準における省エネ等級4を標準としている。

——具体的な外皮の仕様は？

断熱材はウッドファイバー中心だが、予算が合えば遮音性が高いセルローズファイバーも利用する。貫が断熱材の沈降防止になるので相性はよい。いずれにしても、内側真壁で充填断熱では、ちりと貫の寸法を除くと約80mmが限界。寒冷地などでは軸組の外側に飼い物を打って45mmふかして対応する。

足元は関東では基礎内断熱として立ち上がりと外周部1mの底板上にスタイロフォーム50mm厚を張る。暖房は床下エアコンが標準だ。部屋ごとの温度差は多少生じるものの、40坪の家でもエアコン1台で暖かい。

——伝統的な木造の将来はどのようにあるべきか？

伝統的な木造建築も発展していかなければ建てる人がいなくなる。今の顧客の多くはデザインで依頼先を選ぶ。断熱性能や耐震性能も求める。建て主目線に立つなら、新しい省エネ基準は軽々と越えなければならぬ壁だ。それをクリアできれば、

伝統的な木造建築が持つ吸放出性能や蓄熱性能などのパッシブな性能を特徴として打ち出せる。ただ構造材を「真で継ぐ」構法だけに、伝統に忠実に従うと内外真壁が基本となるので気密の確保がネックになる。

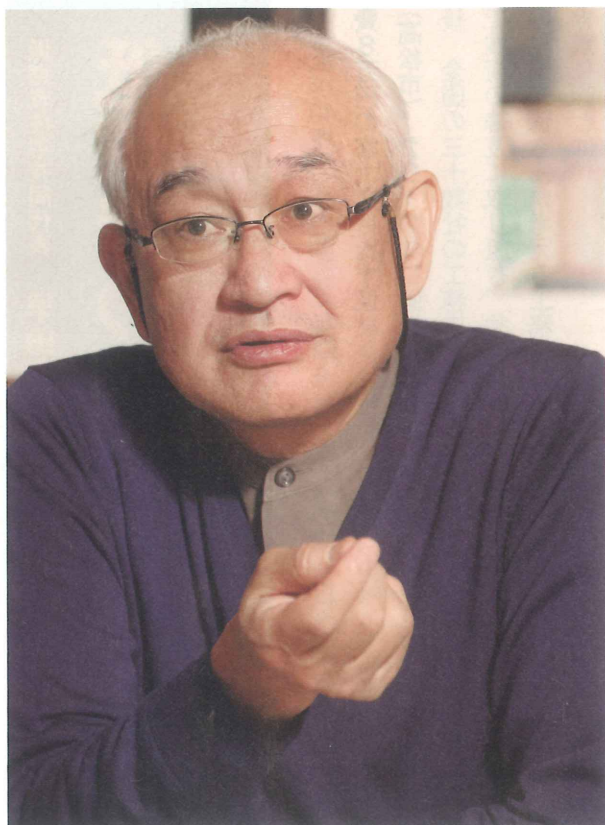
日本の木造建築は戦後に北米化し、今後は北欧化する。それでも捨てられない部分がある。なぜ玄関で靴を脱ぐのか。湿気があるから足の裏が気持ち悪いのだ。省エネの技術は亜流でよいから取捨選択し、構法の根幹を残しながら前に進めばいい。

——大工にも省エネ関連の知識は必要になるのか？

今の時代、設計者の立場だと経験豊富な一人棟梁よりも省エネに長じた工務店と組む方がやりやすい。50歳代以上の大工に省エネ技術を学習してもらうのは難しいからだ。

意欲的な若い大工は全国にいて、私たちの勉強会や講演会にも顔を出してくれるが、そうした大工たちでも情報面では遅れがち。そのことが理由で受注できず、技能が廃れるのは残念だ。

「技術」は図や文章で残せるが、「技能」は経験にしか残らない。技能を残すためにも、若くて意欲的な大工は、話の分かる設計者と組むべきだ。



「省エネ基準を満たしたうえで、吸放出性能や蓄熱性能といった特徴をアピールすることができればいい」と話す松井郁夫さん